

ノーマライゼーション

高知市社会福祉協議会障害者福祉センター

Vol.35

2013.2

「高知新聞」

◆高知市障害者センターが福祉車両導入◆高知市障害者福祉センター（高知市堀町）は、このほど、半身まひの職員が運転できる福祉車両を導入した。

個性まひで右半身がまひしている男性職員（50代）が運転できるよう、右側のウインカーレバーを左側に移すなどの改造を加えた。佐竹敏彦センター長は「障害者でも働きやすい職場環境を広めるきっかけにしたい」と話している。



「読売新聞」

障害者用の公用車導入

体験学習学校訪問に活用

高知市社会福祉協議会が、障害者用の公用車を導入し、13日、同市堀町の市障害者福祉センターで、出発式を行った。半身まひの市障害者福祉センター職員が運転する福祉車両が、主に採用。障害者への理解を深める活動に生かしていく。

高知市は今年も、障害者用の公用車を導入し、体験学習学校訪問に活用する。これまでは、専用車はなかった。今回、高知市社会福祉協議会が、市障害者福祉センターで、体験式を行った。半身まひの市障害者福祉センター職員が運転する福祉車両が、主に採用。障害者への理解を深める活動に生かしていく。

高知市社会福祉協議会が、障害者用の公用車を導入し、体験学習学校訪問に活用する。これまでは、専用車はなかった。今回、高知市社会福祉協議会が、市障害者福祉センターで、体験式を行った。半身まひの市障害者福祉センター職員が運転する福祉車両が、主に採用。障害者への理解を深める活動に生かしていく。

特集!

障害者の今。～実情の把握がむづかしい～

- ②～⑥
- 障害者福祉センターだより ⑦
- リレーエッセイ ⑧
- インフォメーション

2.0へゴー

企業の障害者雇用率が従業員50人以上（現行56人以上で1.8%）で2.0%に、平成25年度から義務付けられます。雇用増の一翼を担うべく高知市社会福祉協議会として障害者対応のリース車を導入しました。

障害者の今。 実情の把握がむづかしい。

二四〇〇〇。これは、平成二十四年現在、高知市内で何らかの障害をお持ちの方々の概数で市人口の約7%に当たる数字です（高知市の人口約三十四万人）。今回、その実像に迫ってみたいと思います。

障害者として民生委員の仕事に生かします。

斎藤敏仁さん（六四）。市内神田地区で民生委員として活躍中。

現在、内部障害で障害四級。今まで自分がそうなるとは思いもしなかったということ、それは突然のことだったと言います。平成二十四年七月、健康診断で大腸がんと診断され直ちに手術。退院後はストマを着けた生活となりました。

県西部の高校を卒業後、会社員として勤務し、退職に際し、PTAや町内会などボランティア活動をしていた事等で鴨田地区民生委員児童委員協議会

の藤原雅道会長の知るところとなり地域の民生委員に推薦され現在二期目に入っています。

「それまで元気なものでしたのでまさか、こんな病気になって、しかも障害者になるとは、夢にも思っていませんでした。障害の事を一時は悩みました。でも、改めて障害者とは今の社会状況の中でその立場に立って物事が見れます。以前は他人事でしたが、障害を持った者の気持ちが分かります。民生委員の仕事に生かしていきたいです」と斎藤さん。

「でもね、一番のネックは個人情報保護法です。もしもの時のためにいろ

いろ知りたいのに教えてくれないんですよ。人に知られたくない秘密もあるとは思いますが…。断られると難しい点があるんです。助けたくとも助けられないんです。「仕事が終われば、たまにはお酒も。付き合いは嫌いな方でなく誘われると二つ返事。そこが活動の源にも。

看護師をしている奥さんの絹代さんの応援もあり、孫の「おじいちゃん、頑張ってね」の声に、民生委員としてまた今日も張り切る斎藤さんです。



▲「おばあちゃん体の具合は怎麼樣ですか」と声かけする齋藤さん、今日は高齢者宅の見回りです。



▲「障害があるといっても甘えてちゃあネ…」と大島さん。

目が見えなくても、やれることはあります。

大島香代子さん（六〇）。糖尿病後遺症で視力を失い、現在、障害一級。子供三人を育て、孫もできてほっと一息というときでした。

透析で週三日通院中だが元々が何事にもくじけることもなく明るい性格なので、友達も多く、その支えもある日々。全く目が見えなくなつた

今、調理や買物などで週三回ヘルパーを利用。つい最近までは全盲でも可能なボランティア活動にも携わってきたとのこと。

今は、友達などに誘われ温泉に行ったり、食べたいものを食べに行ったりです。

「でもね、行政ってね。私が障害一級で目が見えないと分かっているのに役所に書類を書きに来なさいって

いうのよ。何でしようね」と。日頃の和やかな中に、障害者施策のはざまを指摘されます。「パソコンでネットワーク化されているので画面で検索できるのに、それをしないのよ。個人情報という以前の問題でしよう？」と今の行政の在り方に疑問も。

大島さんは、私達が実態を把握ができていない人の一人でした。障害者施策を推進する上での課題でもあります。



1%の把握となっていることが課題です。

障害は、その症状によって身体障害、知的障害、精神障害の三種に分けられています。

ところで、二万四〇〇〇人の障害を持つ方々のそれぞれの状況は、本人は行政の手続きによって把握されていますが、サービスが提供されている事業者以外あまりその状況は知られていません。意外と思うかもしれませんが、地域福祉の第一線で活動している民生委員さんにも実態の把握は限られているのが現状です。その足かせとなっているのが「個人情報保護」です。

障害者施策を進めていくべき私たち高知市社会福祉協議会・障害者福祉センターでも把握している障害者の皆さんは市から委託を受けている高知市障害者相談支援センターの二百四十七人（平成二十三年度末実利用者数）と就労継続支援B型事業所きずなの利用者二十一一人（定員二〇人）であり社会参加事業の各教室利用者を含めても三〇〇人程度となっています。

ということ、私たちが障害者福祉セン

ターが、状況をつかんでいる障害者は1%少しいたということ、です。

それでは障害者の地域実態はどうでしょうか。

高知市の資料でみると、障害者の約一割が医療機関に入院しているか施設に入所しており、残り九割が地域で生活していると思われま

す。こういった中で、平成十一年度から関わってきた人の数は約一一〇〇人に上っています。

そういうことで私たちは、二万二〇〇〇人の方々のうち九割強の方々の実情が分からないという現実の中にあります。もちろん障害者の皆さん一人ひとり、それぞれでは生活し存在していますが、地域で支援する立場の者には、情報としては把握されていないということ、です。

ここに問題課題があり、地域への個人の情報開示が地域福祉を進めていく上での大きな「きっかけ」となるという意味があり

ます。

地域福祉の大きな担い手として民生委員や「向こう三軒両隣り」の町内会の果たす役割は重要です。地域での情報開示で民生委員や町内会につながれば、そこから地域でのネットワークや連携が生まれ、「お互い様」のこのころの下に支え合いが生まれてきます。同じように、地域の自主防災組織につながれば、いざという時の災害の対応が可能となり、いのちが救われる仕組みができてきます。

これが地域福祉の始まりであり、そこからいろいろな対応策が取り組まれるようになります。

障害は、もともと障碍もしくは障壁と表記していたが、戦後の昭和二十一年、当用漢字の告示で、障の字が使用できなくなり、代わって害の字が当てられたもの。障害について賛否の声があり、「障がい」としている例もある。



▲神田地区の防災訓練に初めて参加しました（神田公園）。

命をつなぎたい。 高知県聴覚障害者協会の取り組み

高知県聴覚障害者協会（竹島春美会長・会員一八〇人）は、平成二十四年六月十七日に行われた高知市町内会連合会（会員数七百六十九人）の総会の席上で災害時の支援を依頼、会場より「要支援者の名簿が必

要」との意見が出され、十一月二十五日神田小学校区の三十八町内会で構成する神田地区町内会連合会（会長・田中智、新吉野団地自治会長）の自主防災組織が実施した防災訓練で初めて地域に承諾した協会会員の名簿が提出され、併せて防災訓練にも十七名で参加されました。

命をつないでいく行動を身をもって示されたところですが、「耳が聞こえない」「話せない」という状況を取り扱うための伝達手段としての筆談や大きな手振りなどの動作によって知らせるといったことの大切さも改めて共に感じたところです。

障害者の割合

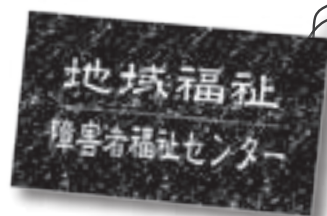
障害者総数 23,746人	身体障害者数 16,002人	67.39%	知的障害者数 9.48% (2,251人)	精神障害者数 23.13% (5,493人)

身体障害者数 16,002人	65歳以上 11,075人	69.21%	65歳未満 4,927人	30.79%

精神障害者 5,493人の約4割 2,188人が入院
 施設入所者目標値 356人以内（平成26年度） 2,544÷23,746=10.7%
 資料：高知市障害者計画障害福祉計画（平成24年～平成26年）

（障害者人口は、高知市人口339,430人の6.99%）

支援の第一歩は地域への情報開示です。



障害の有無に関わらず住み慣れた家庭や地域で暮らしたいというのは当たり前のこと。それがかなうのは地域での支援があつてこそ、そのためには地域に自分の存在を伝えることが基本になります。情報の開示ということですよ。

平成二十四年十月四日、高知市障害者福祉センター運

営委員会を開催、高知市身体障害者連合会、高知県聴覚障害者協会、高知県知的障害者育成会、高知市精神障害者家族連合会、高知県難病団体連合会等の各団体の参加の下、障害者の地域福祉に向けた取り組み等について議論されました。

各団体の協力や支援により会員の地域への情報開示の有無を開示受諾され

た方々より、地域の民生委員や町内会、自主防災組織等と連携し地域福祉につなげていくべき方向性が了承されました。

これを受けて平成二十五年度から、二万四〇〇〇人の障害者の皆さんの情報開示を前提とした地域福祉の取り組みを進めていきます。

障害者のうち六十五歳以上の者は、約七〇%となっており、高知市の六十五歳以上の高齢者の約二割が介護保険利用者です。

厚生労働省の調査では、年齢が高くなるに伴って、障害者の出現率が高くなっているとの結果が出ています。

これらの原因の多くは、交通事故や労働災害といった不慮の事故よりも、脳卒中後遺症や内部障害などいわゆる生活習慣病に起因するといわれています。高知市内で年間生まれる赤ちゃんのうち

旭地区民生委員児童委員協議会 西川義啓 障がい者福祉部会部長に聞く

——部会が作られたきっかけは。

民生委員として地域の皆さんへの支援活動に取り組んでいく中で旭地区民生委員児童委員協議会としての活動を掘り下げて幅広く取り組んでいくこと十年前に三つの部会を作ったのですが、その中で障害者問題の専門部会として設けました。

——どんなことをしていますか。

年二回の研修と施設訪問を行っています。よきこい祭に欠かせない鳴子を作っている小高坂更生センター、養護学校やすすめ共同作業所など障害者施設を見学して、それぞれの状況を教えてもらったりしています。昨年にはNPO法人ワークスみらい高知の竹村利



道代表に障害者総合支援法の目指すこれからの障害者問題の進めていくべき方向性について講演をしていただきました。

——部会ではどのような話し合いがされていますか。

まず障害者の実情を知ることから始めようということ、そして民生委員が全てを背負い込むのではなく、町内会や自主防災組織などと連携して共に取り組んでいくという声があつておち。

——障害者問題を進めていくに当たっての「バリアー」は何か感じますか。

日々の活動の中で、課題となつてきているのは、障害者の皆さんの情報が少ないということです。個人情報というところで、私達も手探りで当たっているのが実情です。もっと広く情報を教えていただければ支援の輪が広がるのと思っています。

平成18年厚生労働省調査(出現率)

30歳代	0.6%
40歳代	1.2%
50歳代	2.4%
60歳～64歳未満	4.9%

・高齢化に伴い障害者の割合が増加



▲高知市障害者福祉センター運営委員会 (高知市障害者福祉センター)

障害を持つて生まれてくる割合は〇.四%程度ですが、長生きとともに障害者となる可能性が高くなるとこれらが示しています。そういう点では長寿社会はだれもが障害をもつということでもノーマライゼーションの社会でもあるということですよ。

障害者福祉センターだより



平成 24 年 12 月 13 日 (木) に、障害者の課題である移動手段の確保に向けた取り組みの一環で、高知市社会福祉協議会が導入した障害者用の改造公用車の出発式を高知市障害者福祉センターで行いました。

当日は、高知さんさんテレビや高知新聞、読売新聞の取材が入り、同日の夕方のニュースと翌日 12 月 14 日 (金) の新聞で報道されました (表紙関連記事)。

平成 24 年 11 月 17 日 (土) に本年度 2 回目 (1 回目は 6 月 30 日) の「障害のある人の運転教室」をいの町にある高知県運転免許センターで開催。38 歳から 70 歳まで 10 名が参加。今回はコースでの運転や運転適性検査、車いす利用者による車への乗り移りの実演等を行いました。

▼読売新聞



▼高知新聞



平成 25 年 1 月 15 日 (火) に学校法人龍馬学園国際デザイン・ビューティカレッジの協力で、市内在住の障害者に生徒達の技術を生かした爪磨きとハンドリラクゼーションのボランティア体験を行いました。

生徒も参加者も初めは少し緊張した様子でしたが、次第に打ち解けていき、終始笑顔の絶えない和やかな体験となりました。参加者より、「爪がきれいになって、自分の手ではないみたい」「定期開催されたい」との声も。この事業は、高知新聞と読売新聞で報道されました。



平成 24 年 12 月 22 日 (土) に「ラベンダー・ハーブとアロマセラピーの学校」代表の瀬尾真生さんを講師に迎え「自立支援講座調理講習会～XMAS! ハーブで調理講習会～」を開催しました。

講座では、エストラゴン風味のクリームシチュー、いろいろ野菜とクリームチーズのカナッペ、ローズマリー風味のローストチキンといったクリスマスにちなんだ料理を皆で楽しく作りました。また、スペシャルゲストのサンタクロースから参加者にクリスマスプレゼントが渡され、参加者も大喜びでした。

「聞こえない日本人？」

社団法人 高知県聴覚障害者協会 会長 竹島 春美

1人で歩ける、目は見える、耳もある、見た目は健康な人と変わらな
い。近づいてくる救急車のサイレン、呼び出しの放送の声などは聞こえない、聞こえにくい。聞こえる人たちが日常自然にコミュニケーション、伝達手段として使っている
音声言語『日本語』で普通に話しかけられると何を言っているのかわからない、わかりにくい、まして流暢には話せない。
聞こえる人たちとは違うコミュニケーション、伝達手段を必要としている、それが聴覚に障害がある人たちの姿です。

昨年夏、県内の某観光所に聞こえる友人と立ち寄ったときのことです。自転車から降りて観光所に入った外国人が、受付でカタコトの日本語で話し始めた時、奥から別の職員が出てきてペラペラと流暢な英語で対応していました。手話ができる友人は「英語なら対応できて、同じ日本人なのになぜ聞こえない人には、手話で対応できないのだろうか、腹立たしい」と言いました。

世界、日本のほとんどの人が音声言語を使います。音声言語とは違う手話などを使う人は少数です。とはいえ、私たちも日本人であって、県民市民です。自分は外国人な
がや？と思わなくてもすむように、ごく当たり前
に自分たちの言語で安心して暮らしていきたいと願っています。



Information インフォメーション

障害者福祉センターでは、車いす・アイマスク・手話・点字・要約筆記を「ふれあい体験学習」として実施しています。

平成 24 年度 実施状況

小学校				中学校	その他団体
朝倉小学校	江ノ口小学校	五台山小学校	春野西小学校	介良中学校	こうち旅広場
朝倉第二小学校	大津小学校	小高坂小学校	一ツ橋小学校	大津中学校	高知商工会議所
旭小学校	追手前小学校	新堀小学校	初月小学校	高校	高知県障害保健福祉課
旭東小学校	介良潮見台小学校	第四小学校	三里小学校		(県内の旅館やバス会社の従業員、ボランティア)
泉野小学校	介良小学校	第六小学校	横浜小学校	追手前高校	四国運輸局
一宮小学校	鏡小学校	高須小学校	横浜新町小学校	高知西高校	
潮江小学校	久重小学校	長浜小学校			
潮江東小学校	神田小学校	行川小学校			
浦戸小学校	江陽小学校	秦小学校			

編集後記

今、社会福祉協議会は「地域福祉の推進」ということで、地域につながりを取り戻して、住み慣れた街でみんなが安心して暮らしていける社会を目指す取り組みを始めています。「地域福祉の推進」というと何やら難しいことのように思えますが、隣近所の付き合いを取り戻して行って、地域の人たちの中に自然な連帯感を生みだしていくことです。障害者問題も地域の連帯感が生まれていく中で、少しずつ良い方向へ向かっていくのではないのでしょうか。取材で得た感想です。(A・M)

